

稲 山 会 通 信

第 49 号

2024 年 7 月 1 日発行

発行人:村田宣男 発行所:稲門山の会顧問 TEL: 043-486-0239 MAIL: yukuemnamekata@gmail.com ©稲門山の会1998

巻頭言:

新代表 村田宣男 (S52 年卒)

稲門山の会、この度新代表を務めることになりました村田です。私は今から丁度 50 年前早稲田大学に入学しました。入学時にもらったガイドブックに、オールラウンドな登山を目指しヒマラヤやアンデスに 3 回の遠征実績がある山の会の案内が載っており、理想とピッタリで入学後すぐに入会を申し込みました。4 年の時に結果的に最終号になる雑誌「山」を刊行する機会がありましたが、その時に聞いた話では私が第 20 代の幹事長とのことでした。在学中は勉強そっちのけで山登りにいそしみ、学生時代で思い起こすことは大半が山の会関係です。



私は小さいころから山登りが大好きで中学高校も山岳部に属していたのですが、大学卒業後の 20 代後半からは仕事が大変忙しくなり、以降 30 年以上山登りからは遠ざかっておりました。60 歳に近づくころから山登りを再開していたところ、2, 3 年前に前代表の行方さんから話があり、コーチ会で現役学生の登山指導をすることになりました。登山は再開しても昔のように雪山やバリエーションルートを登る訳ではありませんので、大した指導はできませんが逆に刺激を受けています。ここ数年は毎週のように山登りに出掛けるようになり、今まで余りなじみのなかった九州や四国の山にも遠征しています。やはり自分は心底山が好きなんだと改めて感じております。コーチに就任する前は OB 会活動とも全く疎遠になっておりましたので、代表には相応しくないと思うのですが、諸般の事情でこのような運びとなりました。継続して OB 会活動に積極的に携わってこられた方々には大変恐縮ですが宜しくお願いします。

ようやく普段の生活が戻りつつありますが、ここ数年のコロナ禍は現役山の会の活動に大きな支障をもたらしました。その環境下でも活動を絶やさず、危機を乗り越えた現役学生、及び関係各位の努力には深く敬意を表します。昔とは登山のスタイルが大分異なりますが、現役諸君には自分達の好きなやり方で充実したサークル活動を続けて欲しいと思います。また、自分が少しでも力になれば幸いです。稲門山の会の課題としては若手会員が極めて少なくなっておりますので、若年層の勧誘活動を精力的に進めたいと思います。

山登りは性別年齢に関わらず誰にでも楽しめ、山に登らなくなっても登った経験は素晴らしい財産です。稲門山の会がこの山好き仲間の心の故郷であり続けることを祈念します。

【特集Ⅰ：2024 稲門山の会総会・新年会】

1. 2024 年総会

こんにちは。酷寒の折に、2024 年稲門山の会総会にご参集いただきありがとうございます。代表の行方正幸です。お陰様で、4 年振りに早稲田の大隈会館で総会、新年会を開催することができました。本当に感無量です。今年も昨年同様、大勢の皆様の出席をいただきました。ありがとうございます。



挨拶する行方代表

第1号議案の事業報告ですが、2023 年は、全世界的に感染拡大した新型コロナウイルスの猛威も収まり、我が国も早稲田大学も元の日常生活が取り戻すための一年となりました。

このような中、現役学生については、20 数名の新入会員が加入し、歓迎山行が行われる等サークル活動が再開されました。また、7 月には加藤健一郎氏を新会長に迎え、念願の夏合宿については7月に八ヶ岳、8月に木曽駒ヶ岳と2パーティーが出発しました。個人山行についても春山、残雪期、沢登り、北アルプス、北海道の大雪山と活発な活動が行われました。加藤会長には新年会でご挨拶をいただきました。

OB会については、2023 年は「稲山会通信第 47・48 号」の発行、役員会3回、コーチ会4回、山の勉強会、谷川岳OB合宿、完史荘の暑気払い等活発な活動を展開してまいりました。その他の意見としては、ハガキで会報の充実、簡素化、ホームページの見直しなどが寄せられています。2024 年も村田新代表のもと、OB会の各種イベント等、安全で楽しい活動ができるよう精進して参りますので、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

第2号議案の役員の選任

【退任役員】

名達一彦(S51 年卒)
厚木紗里(H31 年卒)
岡田瑞紀(R 3 年卒)



【稲門山の会の新体制】

代表	村田宣男(S52 年卒)
副代表	常数英昭(S49 年卒)
事務局長	米山不器(S54 年卒)
役員	柴原 至(S52 年卒)
	鹿間行喜(S51 年卒)
	三宅辰幸(S52 年卒)
	本田伸樹(S56 年卒)
	山路 淳(S56 年卒)
	西山 透(S57 年卒)
	天野智之(H4 年卒)
顧問	行方正幸(S50 年卒)

ゆうちょ銀行内の振替……振込口座番号：00100 - 2 - 333067：稲門山の会
他行からの振込み……ゆうちょ銀行+018+普通預金 5130715：稲門山の会

稲門山の会 単位:円					
項目	収入	支出	残高	備考欄	
前期からの繰越額			3,182,796		
年会費(振込分,新年会時現金分)	405,000			4,000円×100+5,000円×1	
寄付金	1,000,000			匿名	
新年会会費	177,000			42×4,000円 寄付9000円	
預金受取利息	31				
収入合計	1,582,031				
新年会費用		361,624		講師謝礼30,000円含む	
新会長囲む会助成金		32,000		新会長、学生分 完之荘	
稲山会通信45号、46号		245,794		印刷費、発送費	
会議費		23,890		役員会	
銀行振込手数料		2,140		5回分	
ホームページ管理料		43,740			
郵便振替用紙作成		3,370			
支出合計		712,558			
収支合計	1,582,031	712,558	869,473	4,052,269	
項目別預金残高内訳書					
一般会計	ゆうちょ銀行		1,085,111	通帳残高額を確認済	①
	年会費入金振替郵便口座		404,927	通帳残高額を確認済	②
	みずほ銀行普通預金口座		703,608	通帳残高額を確認済	③
特別会計	予備費	ゆうちょ銀行	定期預金	843,000	通帳残高額を確認済 ④
	予備費	みずほ銀行	定期預金	1,015,623	通帳残高額を確認済 ⑤
	合計		4,052,269		
上記の会計報告を致します。					
会計幹事 柴原至					
(代表が銀行通帳残高書と照合確認済み)					

議案の採択

事務局よりハガキによる賛成は52通、保留1通あったと報告があり、司会者から挙手で採択が行われ、出席者全員が賛成となり、総会の賛否の合計は賛成90、保留1となり、議案は成立しました。

特別講演会 野々村邦夫氏(元国土地理院院長)

2024年の総会・新年会は、元国土地理院院長の野々村邦夫氏から「地形図で山を見る」というテーマで講演していただいた。剣岳の標高の変遷など楽しい講演に拍手が沸きました。



2. 2024 新年会 (敬称略)



開会と乾杯の発声は宮野準治 O B (S35 年卒)



乾杯！！





加藤早大山の会会長



現役学生の皆さん



校歌斉唱リードは三宅 OB (S52 年卒)



ㄱ ワセダ、ワセダ、ワセダ、ワセダ ㄱ



集合写真です



ㄱの挨拶は金子治雄 OB (S41 年卒)

3 新役員紹介 (1) 入会の頃



本田 伸樹 (S56 年卒)

私は 1977 年に早稲田大学に入学し同時に早大山の会に入会した。

右も左も分からない新入生の身分で入学手続きを済ますと、当時は懇切丁寧なガイダンスもなく、事務局で入学キット一式をポーンと渡され、何時迄に履修科目の登録を済ますようにと言いつ渡されたのみであった。桜が満開の頃、まだ授業の始まらないキャンパスを歩いていると

無数のサークルの勧誘の出店が通路にところ狭しと並び、それぞれの出店を冷やかすのは楽しみであった。しかし高校時代に山岳部の部員であった私は、大学に入ったら登山をしようと決めていた。その為、一浪時代も毎朝 5 時に起きて 5 km のランニング、懸垂、腹筋、腕立て、ヒンズースクワットのトレーニングを欠かさなかった。一時、AC への入部も考えたが、私の力量では無理そうなのでもう少しソフトな学生の会のサークルを探してみようと思った。

出店での勧誘はさておいて、学生の手帖を見ると、早大山の会を始め、岳友会、山岳アルコウ会、青稲会、岳文会など山岳関係のサークルの部室が集中している当時の一号館5階に足を向けた。そこでたまたま人の気配のする山の会の部室を「あの一、済みません。」と戸を叩くと、偶然に高校の先輩であった村田宜男さんがいらした。彼は現役で早稲田大学に入学され新幹事長の任に就かれていた。そして村田さんの「こいつは入るよ」の一声で実質的に入会が決ま



つ た 。

桜の散る頃、いついつに新歓山行があるから新人は来るようにとのお達しがあった。そこで集まった新人は志知和彦さんのバンに諸器材とともに乗せられて夕刻に一路丹沢に向かった。着いたのは作治小屋出合い。

新人は3年生以上の先輩と共に広い8人天に集められ、宴会が始まった。献立はおでん。2年生の手ずからのものである。人生初めての酒らしい酒に酔った。もう既に時効だろうが、当時は20歳未満のアルコールの制限が今ほど厳しくなかったもので、大学入学と同時に酒解禁と考えられていた。その晩は呑んだ。受験勉強からの解放感と、これからの大学生活への希望で自然と酒杯が進んだ。

そして志知さんの音頭で春歌の嵐が始まった。

しかし、新人同士ではまだ態度もごちなく互いに言葉を交わすことも少なかった。このような雰囲気の場合は皆、慣れていないで無理からぬことであった。それに皆それぞれ登山の経験もまちまちで、バックグラウンドも異なるので親しくするには時間がかかるようであった。

私は登山に憧れていた。いつか滝谷や谷川にも行って見たかった。ただどこも山岳雑誌で見ただけの未知の世界で自分がどこまで通用するか分からなかった。その頃は山の会の方向性や登山指向など皆目、見当がつかなかった。

そんなことを考えるうちに、酒が廻って頭がくらくらしてきた。明日も早いことだし、三々五々、就寝となった。

翌朝、雲は多いものの、春らしい暖かな朝である。朝食後、そのまま下山組と、沢登りを含む登山組に分かれて解散した。

私は沢登り組に加わった。パートナーは3年生の故宮垣秀章さんと同期の早川明利君である。

目指すはセドの沢左股。この沢は高校時代、何度も登っていて旧知のルートである。堰堤を過ぎ、入谷し幾つかの小滝を登り、難場の涸れ滝もなんとということなく越えて詰めへと向かっていく。この山行で初めてザイルというものを手にした。借り物のハーネスにザイルを通して見様見真似のブーリンで結びトップの宮垣さんにビレイしてもらう。ザイルの安心は何ものにも代えがなかった。高校時代はノーザイルでこれらの滝を直登していたのだから随分無茶危険なことをしたものである。詰めの塔の岳に到着し、大倉尾根を滑るように駆け降りる。帰りの打ち上げはなかったと思う。

これからの大学登山生活を夢見て帰りの小田急線車内は安らかだった。

(2) 私の失敗事件簿～楽しい山登りは安全と安心から

西山 透 (S57 年卒)

昭和 53 年に入学し、大学時代の 4 年間、山の会でお世話になった西山です。昨年、40 年余り勤めた会社を退職したのを機会に、OB としての活動を始めました。とは言いまでも、社会人 2 年目、5 月ゴールデンウィークの北海道・大雪山単独縦走に挑戦し、ものの見事に 2 日目で挫折したのが本格登山の最後となりました(これも失敗談その X です)。

大学に入るまで、ほとんどの東京人(正確には埼玉人ですが)がそうであるように、遠足で登った高尾山ぐらいしか知りませんでした。4 月、大学キャンパスの出店で新人勧誘の網に引っ掛かったのが縁で、新たな、そして貴重な 4 年間を過ごすことができました。初心者の私でしたから、多くの失敗談の持ちネタを抱えています。今回はそのなかから、記憶を頼りに、ご紹介したいと思います。



失敗談その 1 — 1 年生の八ヶ岳春合宿

大学では何か新しいことをやろうと登山を始めましたが、同期の入会者が 10 名ほどいたこともあり、当初は「雪山と岩はやらない」と公言していました。そんなこともあり、1 年目の富士山雪上訓練をパスしています。ところが一人やめ、二人やめと、年が変わる頃には、いずれ自分以外は誰もいなくなりそう、という状況が予想されました。そのような時に参加したのが雪の八ヶ岳を縦走する春合宿です。事件は主峰赤岳を過ぎ、稜線直下をトラバースしている時に起こりました。

雪に慣れていないため、当然ながら怖い。何が起こるか？ 体が山側に寄り、重力方向でなく、斜めのベクトルが加わって足元の雪が崩落しました。あわや「数百メートルの直滑降か!!」となりましたが、その瞬間、無意識のうちにピッケルを雪に突き刺したため、事なきを得ました。もともと、ピッケルを掴んでいた手を放しており、手首に巻きつけていたシュリングに助けられました。その後の休憩時に撮った写真を見ると、顔面蒼白になっていたことが強く印象に残っています。

助かったのはたまたまですが、あらためて考えてみますと、冬山前の雪上訓練で、一日中、ピッケルストップを繰り返す練習はこのためだったと思うとともに、不参加で即雪山実践した自分の浅はかさが反省されます。

失敗談その2 — 2年生の北アルプス夏合宿

その日は合宿が始まったばかりで、40 キロ超の荷物に喘ぎながら、トップを務めていました。あいにくの雨模様のなか、尾根の巻き道を歩いている時に事件は起こりました。片側が崖で切れ落ちている道を小走りに下っている、という認識はありました。気がつくとも目の前にあるべき道が消えていました。要は道がカーブしており、自重を含めて 100 キロの慣性力が働くなか、曲がり切れずに空中浮遊していました。

「死に際に人生が走馬灯のごとく駆け巡る」と言いますが、「シマッタ!!」と思っただけ。地縛霊になるところでしたが、次の瞬間、おなかに強い衝撃を感じました。後でわかったことですが、崖に一本だけ生えていた太い木に引っ掛かっていました。「助かった!!」と安堵したのも束の間、背負っていたキスリングが前に倒れ、幹を支点に、上半身と下半身が見事にバランスして身動きできない、少しでも動いたらどちらかに落ちる、という万事休すとなりました。その時はじめて強い恐怖心がこみあげてきました。結局はSOSを発し、ザイルを使って救助してもらいました。

崖路を歩いていることは十分認識していましたが、雨でぬかるんだ足元の悪さ、夏の暑さと湿気、荷物の重さも加わって、注意力が散漫になっていたようです。

2年生の剣岳冬合宿における「避難小屋便所軟禁」事件、3年生の富士山雪上訓練における「訓練場所探索死の彷徨」事件など、語りたい失敗談はありますが、別の機会に譲ります。

話は唐突に変わりますが、会社人生の最後に、門外漢ながら工場の安全管理責任者を務める機会がありました。安全の世界には有名な「ハインリッヒの法則」があります。「1 件の重大事故の背後には 29 件の軽微な事故があり、さらにその背後に 300 件の異常 (ヒヤリハット) が起きている」という経験則です。

ご紹介した失敗談は、これまで笑い話として憚ることなく披露してきましたが、ある意味、登山中のヒヤリハットです。ひとつ歯車が噛み違えば、重大事故 (死亡災害) につながった可能性もありました。今思えばヒヤリハットに止まったのは偶然にすぎません。

山から遠ざかって久しくなりますが、現役や OB の皆さまの活動に刺激をうけて、山登りを再開することがあるかもしれません。その時、「昔はこんなこと、簡単にできたのに」が一番危険です。自らはエイジングがすすんでいますし、同じ今であっても、周囲の状況は刻一刻と変化していきます。周到的な準備とリスク管理が安全と安心を生み、楽しい山登りにつながる、と心したいものです。「ご安全に!!」 以上



八丈島/底土にて野宿する筆者 (2002 年)



愛媛伊方町佐多岬でツーリング中に野宿する西山OB (2005 年)

～ 「2024 年の返信はがき」 より～

◆清水正昭(S33) 7代目の登山靴を処分して 70 年に亘った登山生活に終止符を打ちました。満足感よりも寂しさの方がはるかに大きいです。◆上田訓央(S33) 体力、気力、知力の衰え、まさにフレイル状態です。山は思い出と共に遠くにありけり、です。◆宮野準治(S35) いつもありがとう。北ア大学を卒業(2021 年)した後は、毎年、紅葉期の上高地を訪れ、山家として育ててくれた新雪の穂高連峰を眺めては一緒にザイルを組んだ亡き仲間や岩の感触を思い出しています。◆上田敦子(S34) 稲山会通信いつもありがとうございます。◆新川浩司(S36) 皆さんによろしく◆廣瀬舜一(S38) 年齢に応じた青春を満喫しています。皆でもっと力強い日本にしたいと頑張っています。◆宮沢壮介(S36) 会長が決まり安心いたしました。高校の同期でつくった鎌倉散策会は 20 年も続いて、今も月 2 回鎌倉、横浜、三浦半島の神社仏閣、丘陵、公園等を歩いています。花ころの会でお会いしましょう。◆山本貴次(S36) 残念ながら欠席します。健康状態はまあ良好です。◆加納孝治(S37) 現役諸君の活動も頼もしい限りです。安全な登山活動を願っています。体調を整え、総会に出席するのを楽しみにしています◆滝沢信一(S36) 総会のハガキをお送りいただき恐縮です。しかし、冬は積雪が心配で出席しにくいです。また夏に懇親会があれば参加したいと思います。皆さんによろしく ◆東正躬(S37) お役目ご苦労様です。当方、年齢なりに元気で医者に通ってます。クラブの今後の発展を祈念しております。◆高尾勝彦(S37) 17 年前に発行された記念誌「山の会 50 年のあゆみ」を折にふれ懐かしくひもとき、元気だった頃を思い出しています。◆金子弘吉(S37) 新役員の皆様ご苦労様です。当方は遠出を控えておりますの、欠席いたします。◆鈴木健夫(S37) 毎日 30 分のウォーキングと週 1 回のボーリング 3 ゲーム、月 1 回のゴルフ 1 ラウンドを続けています。◆竹内敏(S38) 幹事の皆さんご苦労様です。元気ですが、年齢と共に出かけるのが苦になりました。◆内藤錦樹(S37) 山にはご無沙汰ですが、テレビの山番組を見て楽しんでいます。◆村田進(S37) 体力が少しずつ低下中。自宅のまわりを散歩してトレーニングしています。◆打矢之威(S37) 元気に過ごしていますが、稲山会通信に記載したとおり、心身の衰え激しく、今年はスキーはできないかも。◆卯月一好(S37) 病院通いしていますが、まあ元気に暮らしています。◆栗又功雄(S38) 筋力低下で欠席いたします。 ◆松村啓之亮(S38) 元気です。◆白倉俊夫(S38) 元気でおりますが、地元中心の生活をしております。◆小林伸吉(S39) 39 回卒のメンバーは年相応に減っておりますが、60 年間の毎年にもわたり家族会、季節ごとの集まりなど続いています。◆秤勤(S39) 11 月 3 日に家内が逝ってしまい、寂しい正月でした。◆磯部映美(S39) 会報を楽しく読んでいます。最近号では田野辺、金子両氏の記事を読みましたが、現役時代に両氏と夏合宿に同行したことが懐かしく思い出しました。今は 200m 級の山(丘?)をたびたび歩行しております。◆真下健弥(S39) 幹事の皆様ご苦労様です。9 月にコロナにかかり、1 ヶ月位体調が戻らずに苦労しました。現在は好きなゴルフを楽しんでいます。◆藤井榮二(S39)「稲山会」の会報ありがとうございます◆鈴木明人(S40) ①コーチ会の意義と役割を明確にするよう努めてください②会報は少し

整理して簡単にしHPを充実した方が良い。◆山崎征彦(S40) シルバー人材センターの仕事を続けながらTVの「百名山」を見て、新年を迎えています。◆斉藤雄二(S41) ①大腿骨頸部骨折から3年半、ほぼ回復しました。②行方代表4年間ご苦労様でした。10年やって欲しかったけど、自身の判断が優先です。③私はS41年卒ですよ、よろしく。◆濱田政則(S41) 山の会の新会長が就任され、稲門山の会活動も益々進展していくことを祈念します。◆金子治雄(S41) 役員の皆様ご苦労様です。学生の皆さんの活発な活動も頼もしく、自分が元気になるように感じます ◆渡辺征二(S42) 久しぶりに会員の皆さんに会えるのを楽しみにしています。愛犬のクルミⅡ(マルチーズ)との二人六脚の生活ですが、最近は気持が通じ合っています。◆高岡勝(S42) 足のリハビリ中で参加できません。高齢のため稲門山の会を卒業させていただきます。長い間大変お世話になりました。◆佐久間正昭(S43) 23年6月、3度目のスペイン、サンティアゴ巡礼を妻と二人で歩きました。仏側から入り、ピレネー山脈を越えの750km、34日間の旅でした。◆太郎良博(S43) 活発な活動何よりです。安全第一を基本に益々の充実発展を目指してください。年相応に元気に過ごしています。足の衰えを補うべく、年間20回山に登ることを目標にしています。◆丹治和男(S44) 少しずつハードルが上がっている感じがしますが、何とか踏ん張っております。◆島田弘康(S46) コロナ禍で失った3年間を取りもどすべく、暇をみつけては野に山に海に出かけています。最近体力の衰えを感じ、どちらかという温泉三昧にひたっている始末です。◆新井昭夫(S46) 適当に登山靴に親しんでいます。◆福田榮一(S46) 膝痛に悩まされて、思うように山登りができません。稲山会通信をいつも楽しみにしております。◆神谷哲郎(S48) いつも会報を送付いただきありがとうございます。昔を思い出しながら楽しく拝読しております。お陰様で子供二人も独立し、夫婦二人で元気に過ごしております。◆後藤洋一郎(S49) 行方代表の行動力には頭が下がります。新体制への橋渡しも含めありがとうございます。9月に裏劔(室堂～仙人小屋～阿曾原～樺平)に行ってきました。◆岡康彦(S49) 稲山会通信を拝読しております。役員の皆さんの活躍に感謝。◆小竹正雄(S51) 行方さん、4年間お疲れさまでした。引き続き会報を担われるということで楽しみにしております。山行ですが、昨年は別山、荒島岳、伯耆大山に登りました。◆行方正幸(S50) OBの皆さん、現役学生の皆さん、加藤新会長さんありがとうございます。漸くは、壊れた体を癒すために、米沢の小野川温泉や水上の谷川温泉あたりに出沒しようと思っています。露天風呂で見かけたら声を掛けてください。◆石原順三(S51) この冬は、ニュージーランドの秀峰マウント・クック(3724m)に、それを見上げるNZ人エドモンド・ヒラリーの銅像、氷河に削り取られた垂直にそそり立つ屏風岩のような大岩壁群に南十字星と、豊かな自然を満喫してきました。◆倉川秀明(S51) コロナの影響であまり動けませんでした、今年は2018年に次いで、パプアニューギニア島の原生林に住む人々を訪ねる予定です。◆岡安喜久夫(S51) 会報いつもお送りいただきありがとうございます。体調不良のため欠席させていただきます。皆様によりしくお伝えください。◆調昭雄(S51) はり灸院開業6年目に入りました。◆狩野雅(S52) 5月：九住山、韓国岳、開門岳。7月：

ツェルマット、グリンデルワルトトレッキング、聖岳、光岳。9月：月山、鳥海山と遊び、秋は鮭、冬はカレーでマグロは釣り落とししました。2月4日はニセコに行くので欠席します。◆角田清隆(S52) 元気です。◆亀田吉史(S52) 断捨離の日々です。年齢相応に元気にやっています。◆米山不器(S54) 新体制で頑張ります。◆伊藤渉(S55) 新旧執行部の役員の皆様ご苦労様です。◆本田伸樹(S56) 職業人現役の方は中々動けないでしょうが、稲門山の会の若返りを計っていただきたいと思います。◆里方昭彦(S58) 今年も参加できませんが、多くの現役が活発な山行を行っていることを大変うれしく思います。◆天野智彦(H4) 去年の冬山は会津の三岩岳、海外はモンゴルに行ってきました。◆西本英世(H3) 特に変わりなく過ごしています。

特別寄稿1：「低山」歩きもまた楽し！

深澤 徹(S51年卒)



東京都の最高峰雲取山(2063m)



2023年8月雲取山荘と深澤〇B

酒場詩人の吉田類さんが出演する「酒場放浪記」は、隠れた人気番組として知られているが、「につぼん百低山」(「百名山」じゃなく)と銘打って、毎回、年若い美人タレント(うらやましい!)と連れだって、標高1,000メートル前後の「低山」を訪れる別番組も、最近では中々に捨てがたい。

自然、社会、人文と、学問体系は大きく三つに別れるが、3,000メートル級の高山は、主に地質学や生物学、気象学などの自然科学の領域に属するのに対し、里山としての「低山」は、その地域の人々の暮らしの営みと深くかかわり、歴史学や宗教学、さらには民俗学などの人文学の対象領域といえよう。

我が「山の会」に、かつてつどった仲間たちも、どれほど自覚的であったかはともかく(なにしろみな、まだ二十歳そこそこの若造だったのだから)、所属学部や、もちまへの資質によって、山に対する興味関心も、それぞれに違っていたはずだ。

小生の場合、在籍中に墜落事故を起こしたこともあって(その折は先輩や後輩たちに大変なご迷惑をおかけした。この場を借りてお詫びとお礼を申し上げたい)、その後の人生をあれこれ考え、大学院に進んで日本文学の研究者となる道を選んだ。その経緯からも、人文学的な関心から山とのかかわりを持ったことが、後になって強く自覚されるようになった。

赴任した最初の職場（短大）が大阪で、周囲には六甲や葛城、生駒などの1,000メートルにも満たない「低山」しかなかった。山らしい山と言え、奈良の奥にある大峰山系ぐらいで、主峰の大峰山や、その奥につらなる奥駆け道（最高峰は八経ヶ岳1,915メートル）には、泊りがけで何度も登った。ご存じのように大峰は修験の山である。その山頂は、いまでも女人禁制の聖域となっており、ふもと吉野の有力寺院によって維持管理されている立派な宿坊がいくつかあり、そこで出す食事がこれまた、ご飯と、みそ汁と、漬物だけの、なんとも質素なもので、めずらしくも楽しい体験を何度も味わった。

関西にはろくな山がない、そんな不満を解消するため、職場の長い夏休み（なにしろ1ヶ月以上ある）を利用して神奈川の実家へ帰省する際には、リュックを背負って富山県側から入り、信州側へと抜けるルートを探って、北アルプスを何度も横断した。結婚後は、子どもたちを連れて、家族で燕や常念にも登ったが、その子どもたちは成長とともに山から離れてしまい、誘っても、山はもうこりごと、いまでは一緒に登ってくれない。いささか寂しい限りである。

15年ほど前に職場を地元神奈川の大学に移し、暇を見つけては周囲の「低山」歩きを、ひとり楽しんできた。自宅から近い、丹沢や奥多摩、奥秩父の山々だが、関西に比べて関東の山は奥が深く、その植生からして大きく違う。隅から隅まで人の手の入った幾何学的なフランス庭園に対し、自然の姿をそのままに再現しようとしたイギリス庭園と、どこかおもむきが似ている。人の手が入っていても、まだまだ手つかずの、自然の植生がそこここに残されていて、山の醍醐味が、それなりに味わえる。ちなみに子どもたちに人気のアニメ『鬼滅の刃』の主人公竈門炭治郎の炭焼き小屋は、雲取山中にあるそう。

冒頭で紹介した「酒場放浪記」は、最寄り駅から庶民的な街並みを尋ね、その街なかにある面白スポットを紹介したあと、近場の酒場で飲むという、ただそれだけの番組だが（最後に類さんが一句詠む）、「につぼん百低山」でも、最後はふもとの食事処に立ち寄って、地元の名物料理と地酒で、山の疲れをいやすのが定番となっている。それにならって、雲取から下山して三峰神社門前の茶店に寄り、名物の「わらじカツ丼」をパクつくもよし、沢井駅に途中下車して、奥多摩の銘酒「澤乃井」を堪能するもよし、そんなふうにして、人々の暮らしの営みと深くかかわる山の「文化」を、今後とも楽しんでいきたいと思っている。 以上



2022年8月肥薩線嘉列川駅(登録有形文化財)



2023年1月丹沢塔ヶ岳

特別寄稿 2：北アルプス今昔物語

宮野準治 (S35 年卒)

今は昔の北アルプス歩き (walk) と初岩登り (climb) の物語 (2) を紹介します。私が初めて北アルプスに興味を持ったのは、昭和 28 (高 3) 年のこと。当時私は高等学校の水泳部にいて短距離 (100m 自由形) の高校新記録を出すことに集中していたので山登りには何の関心もなかった。その目標が挫折したときに同じ高校の山岳部のキャプテンだった心友の富岡隆が声をかけてくれて登った槍ヶ岳が北アルプスにのめり込んだ第一歩 (詳しくは稲山会通信第 44 号を見てください)。



次の年 (浪人中で予備校通い)、富岡 (日大理工学部 1 年) が“槍ヶ岳への縦走計画”を持ち込んできた。28 年に初めて北アルプスの槍ヶ岳に行った時、肩の小屋のおやじの穂刈三寿雄さんから次は子槍に登ったらどうかと言われていた。そこで富岡は単に子槍に登るだけではなく裏銀座コースを縦走して子槍に登る計画を薦めた。

1. 装備

今度は装備を整えるため登山靴とザックを買う。登山靴は底革と底縁とを保護するために鉄の鋲を打つ。その代表的なものは“クリンカーとトリコニー”、底鋲は靴屋のおやじのムガーがいいという意見に従いそれを打つ (現在ではお目に罹れない)。

ザックは横幅が一尺八寸 (約 55 cm)。

ザイル (今はロープ) は富岡が「子槍に登るときにザイルは必要ですか」と穂刈さんに聞くと「ザイルは小屋のものを貸しますヨ」と言われていたのを思い出し、それに甘えることにした。私が下降するときの方が登りより不安じゃないかと言ったら、富岡はしたり顔で子槍の頂上にはハーケンが打ってあるのでそれに捨て縄をかけザイルを通してアップザイレンで降りればいいという。“アップザイレン?” “それは何だ。”という、富岡は学校の石垣塀で教えてやる、という。

2. 宿泊

その当時は個人の素人の山歩きでは小屋泊まりが普通だった。北アルプスも例外ではなかった。宿泊料は一泊 ¥500。米はまだ配給制 (と言っても若い OB にはわからない人がいると思うが当時コメは自由に買えなかった) だったので一泊 5 合の持参を求められた。この計画だと 5 泊 6 日だから 2 升 5 合になる。

3. 交通

国鉄 (まだ JR ではない) 学割で 5 割り引き (予備校生でも割引券発行してもらえた) 新宿—松本往復 ¥520。まだ蒸気機関車の時代。当時の山行きは殆ど夜行列車を利用 (谷川岳でも例外ではなかった)。三等寝台って知っている? 座席を確保してその下に新聞紙を敷いて足

を延ばして寝る。ガッタン、ゴットン”というリズムが眠りを誘う（当時は客車1等、2等、3等という区別があったのでこれを3等寝台と称していた）。

新宿駅発中央線 22 時 15 分 “準急アルプス 2 号”（細かい点に記憶違いがあるかもしれない）。松本着 5 時ごろ。

4. 裏銀座コース

裏銀座コースは信濃大町から始まる。昭和 29 年 7 月 28 日、“北アルプス三大急登のひとつブナ立尾根”に取りつく。テント生活のための重い荷を背負い喘ぎながら登る新人を含む立教大学ワングル部のメンバーと前後しながらブナ立て尾根に行く。このブナ立尾根が終わると烏帽子小屋。荷物を置いて頂上に向かう。

このコースで面白い経験をする。3 泊目の三俣蓮華小屋（現「三俣山荘」）の夜（宿泊者は我々のみ）。小屋の外でドラム缶の五右衛門プロに入り満天の星空を堪能していると、小屋の伊藤正一さん（伊藤新道開発者。廃道に近かったが最近息子たちにより新しくされたとのこと。著「黒部の山賊」）からもう一泊してゆけと誘われる。その理由が「明日の朝、ウサギが罾にかかっていたらそれでカレーライスを作るから…」というもの。“ウサギカレーか”、顔を見合わせる。しかし、「我々にはコメが槍ヶ岳小屋の分しか残ってないし金もない」というと正一さんはそんなもの、いらないから泊まって行けと言う。「それなら」ということでお世話になることにしたが、心の中ではウサギがかかっているか不安の方が大きかった。翌朝、罾が仕掛けてあるところに行くと 2 匹のウサギがかかっていた。

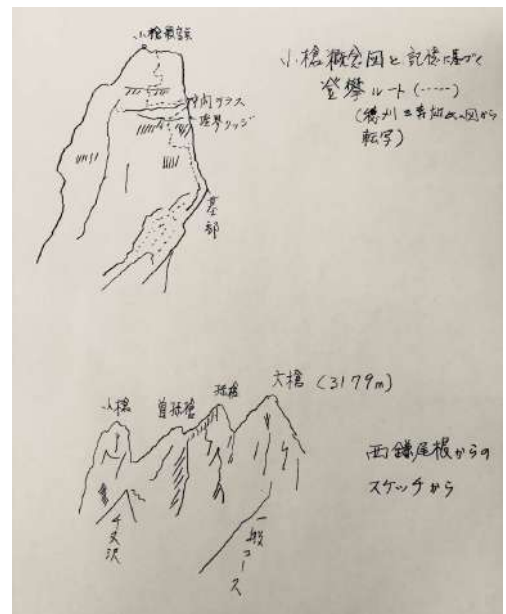
5. 子槍登攀

子槍の登攀の日は快晴に恵まれる。穂刈さんにルートの概略の図を描いてもらい、最も容易なルートの説明を受ける。

まず、小屋からザラバを登り基部で生まれて初めてザイルを結ぶ。富岡からザイルは目をつぶっていても結ぶことができるようにしておけと言われていたので、初めてとしてはかなりスムーズにできる。境界リッジに取りつく。そのリッジの左側にクラックがある。とにかく岩登りというものの初体験。それまでの尾根歩きとは全く感覚が違う。トップに行く富岡も言葉には出さないがかなり緊張しているに違いない。

クラックを登ると教えられた境界リッジの右側に出る。高度感がすごい。小便を漏らしそうな感じになる。リッジを少し上るとまた左側に傾斜したクラックがありそこを伝い中間テラスに到着する。大休止。

中間テラスから南西側をトラヴァースしてチムニーに入る。このトラヴァースは右足から踏み出さないと次のホールドに手が届かない。体が空中に飛び出す格好になるので緊張感がいやにもます。このトラヴァースは、踏み出し以外は思ったほどではなく残置ハーケンもあるのでホールドは小さいがスムーズに登れる。チムニーを通過すると穂刈さんがアドヴァイスしてく



子槍のルート図

れたように傾斜があるもののホールドもしっかりしているリッジでルートも自由にとれる。そのあとは 60 年近い前のことなので（すごく緊張していたこともある）記憶がはっきりしないが、幅が 20～30cm くらいのバンドがあり、それをたどるといったん下降気味になりバンドが狭くなる。そこを降りきるとバンドはまた広くなりその先のフェイスが子槍の頂上につながっている。

頂上で“バンザイ！”を叫ぶ。

達成感とともに誇らしげな気持ちになる。この時、穂刈さんがプリズムで見ていたとのことを後で聞く。この日（昭和 29 年 8 月 2 日）の槍ヶ岳肩の小屋の夕食は子槍登頂を祝してくれてシシ鍋となった。

6. 追記

①登山靴

その後山の会で岩と雪に戯むれることになったが、3 年生のとき、大国先輩（S33 年卒）から「ミヤノ、登山靴の底はビブラムがいいぞ」と勧められ大学の南門前の山の会御用達しの池田靴店（今は無い）で皮底の鋏を抜き日本製のビブラムを張ってもらった。

鋏は爪先と土踏まずのところにトリコニ—6 番をそれぞれ 3 本、1 本打ったものを使用した。

②ザック

1 尺 8 寸のザックの幅が 2 尺 4 寸になったが 2 月の八ヶ岳阿弥陀岳東稜 P1 の登攀中タッシュが岩に挟まり身動きができなくなり滑落。今は縦長のザックが一般的で岩登りにも適している。

③三俣山荘図書室

三俣山荘の図書室が信濃大町駅を出て中央通りを行くと右側にある。私の“ウサギカレー”を書いた手紙もあると思う。興味ある人は行ってみて。

④小屋

令和 3 年に経験したことだが予約したほうがよい。今はヘリコプターで食料が運ばれているので都会と遜色ない食事が提供されるし、生ビールも飲める。勿論コメの持参は必要ないが料金は 2 食付きで 10,000～15,000 円。

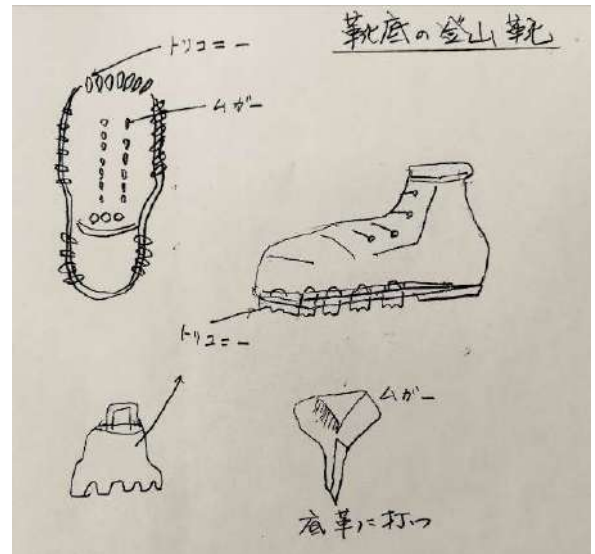
7. おわりに

私は、今は毎年紅葉期に上高地に行き新雪の穂高連峰を眺めながら亡きザイル仲間を偲び、岩の感触や雪の冷たさに思いをはせて居ます。私は登った山を見ることはしますが単なるトッレキングはしたことはありません。つまり思い出がないからです。それがたとえエヴェレストであつても眺める興味はありません。

最後に“子槍節”

アルプス一万尺子槍の上でアルペン踊りを、さ、踊りましょう。

ら、ら、ら、ら……ら、ら、ら。



【特集Ⅱ：最近の山行記録】

(1) 後立山連峰 不帰ノ嶮 登山報告

笠原 豊 (S40 年卒)

不帰ノ嶮～唐松岳を縦走したので報告します。

1. 日時：2023/8/31（木：前泊）～9/3（日）

2. メンバー：笠原豊（S40 卒）、森正紀（山岳ガイド）

3. 行程：猿倉→鍾温泉→天狗山荘→不帰ノ嶮→唐松岳→八方

当初3名で計画し 80 歳台の高齢リスクを考慮してガイドをお願いした。ところが直前に2名夫々行けなくなり、ガイドと笠原の2名になった。夏の猛暑が続いたためか残雪は少なかった。

① 8/31（木）：白馬ペンションあぎ→猿倉→小日向の科尔→杓子沢→鍾温泉泊

氷河調査は、空撮質量収支観測、地中レーダー氷厚観測、雪溪ポール流動観測などが行われ興味深い。



山の郵便屋さん和森ガイド



大日向の科尔手前から白馬岳 2932m



杓子沢の残雪（氷河調査中）とU字谷地形



大日向の科尔から鍾温泉



鍾温泉。湯が流



鍾温泉 2100m、43.1℃毎分 760 リットル湧出

② 9/1 (金) : 鑓温泉→大出原→鑓ヶ岳分岐→天狗山荘



鑓温泉の上に岩場急登ありザイル確保



鑓温泉分岐 2750m 前方鑓ヶ岳 2903m



天狗山荘の受付

鯖の味噌煮、コンロ鍋他美味



天狗山荘キャンプ場

③ 9/2 (土) : 天狗山荘→不帰1峰→不帰ノ嶮→不帰Ⅱ峰→唐松岳頂上山荘



天狗ノ頭から五竜岳・鹿島槍ヶ岳他



天狗大下りから不帰ノⅠ峰・Ⅱ峰・Ⅲ峰、唐松岳



不帰1峰から不帰Ⅱ峰の北峰～南峰、北峰の手前にアングル峰（仮称）



【核心部】不帰Ⅱ峰北面アングル峰上部：核心部のアングル橋は今年の荒天影響で撤去された。登行順序は、右が左の後になるが、地形の上下のつながりを優先して前に配置した。足場・手掛かりがあり不安は感じなかった。不帰Ⅱ峰北面アングル峰下部：中央壁面に鎖が上下2ヶ所垂下しているのが見える。



← 不帰Ⅱ峰北面アングル峰下部、上部の登り、
ザイルで確保



唐松岳登頂 15:40

④ 9/3 (日): 唐松岳頂上山荘→八方尾根→八方

小生の間質性肺炎による息切れ遅速ありタイム維持に努め、心拍 120bpm (最大心拍数の 86%) が度々あった。コースの先読み不足でシャッターチャンス逃しもあったが、眺め良く中味の濃い山行であった。森ガイドの案内と確保により不安無く無事に登頂できた。



丸山からの白馬三山



八方尾根丸山 2430mにて、唐松岳不帰Ⅲ峰・Ⅲ峰南
峰～北峰、天狗の下り、正面下方に唐松沢氷河



丸山からの五竜岳



八方池にて、不帰Ⅰ峰・Ⅱ峰・Ⅲ峰、天狗の頭

(2) 平標山・仙ノ倉山山行

小田 直輝(R 5 年卒)

日 程) 2024/ 2 /23 (金)

メンバー) 齋藤壮呉(修士 2 年)、海崎真穂(修士 2 年)、木村亮英(3 年)、小田直輝(R 5 年卒)

齋藤ら行動記録) 23:30 立川→2:00 平標登山口駐車場→7:00 平標登山口→平標山 10:40→
平標登山口 13:00

小田行動記録) 3:30 新潟市→6:00 平標山登山口駐車場→7:00 平標登山口→平標山 10:40→
平標登山口 13:00

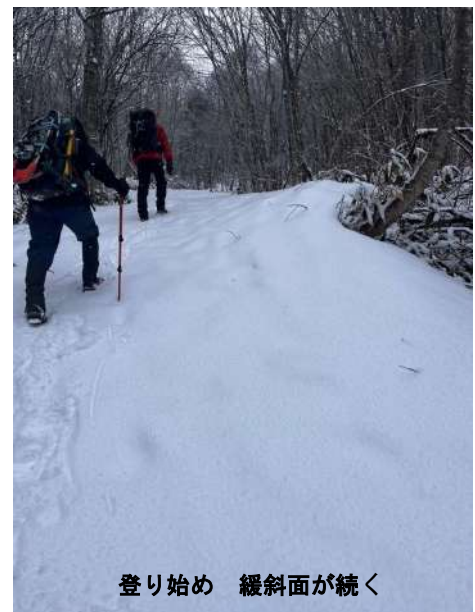
社会人になって初任店は新潟だった。4 月末に着任し、10 月末に車を購入した、車を購入したことを齋藤、海崎に報告し、久しぶりに山に行こうという話になったところに木村も加わり本山行が決まった。当初は雪が多いだろうということから松手山尾根を經由して登山をしようと話だったが、ヤカイ沢の方がトレースがあるだろうという話になり、今回はヤカイ沢から登山をすることになった。

私は前日、19 時に仕事を切り上げ 20 時には眠りについた。3 時に起床し社宅駐車場を出た。社宅を出る時は小雨だったが燕三条あたりから大雨に変わっていき、早くも今回の山行がとても心配になった。しかしながら、湯沢あたりからは雨から雪に変わっていった。6 時 20 分に平標登山口駐車場に到着し、齋藤らが乗る車を見つけたが、驚いたことに軽自動車だった。よく軽自動車で新潟まで来てくれたなと感じた。久しぶりに友人たちの顔を見るととても元気が出たが、海崎はとても顔色が悪かった。朝はいつもこうらしい、少し面白く感じた。冬山装備の用意は時間がかかるのか出発は 7 時となった。

登山口から少し歩きヤカイ沢の方へ進んで行った。雪は少し多かったが足下はしっかりしていた上に急登もなく最初の 1 時間ほどはアイゼンなしで登った。そこから齋藤の指示で全員アイゼン装着とピッケルを装備した。本格的に急登になり、アイゼンで確りと蹴り込み、時には斜面にブレードを刺すなどして登った。斜面は凍っていてラッセルの必要はなかった。約 1 年ぶりの本格的な雪山だったが、大学時代に何度か雪山に行っていたこともあり、問題なく登れた。しかし、森林限界に近づくにつれ、斜面も急になり、アイゼンワークを間違えると滑落するかもしれないと大変怖い思いがした。ふと、こんなに足が震えているのは北穂高岳ぶりではないかと思った。

尾根に出ると、とても風が強くなり、吹雪かれた。全員頭までフードを被ってゴーグルをしていた。側から見たら不審者だろう。

そんなこんなで一般ルートに合流し、10 時 40 分に平標山山頂に到着した。ここから当初の予定であった仙ノ倉山に行くか行かないかの議論になった。全員体力的には問題なかったが、



登り始め 緩斜面が続く

山頂の風が大変強く、吹雪の中、行くのは嫌だなあという雰囲気だった。いつも通り、行くか行かないかじゃけんが始まり、結果、海崎が勝ち下山することになった。木村は行きたがっていたが、海崎が勝ったんだ、仕方がない。前穂高岳の時もじゃんけんして結局、行ったんだっけと懐かしく話した。



計画では松手山ルートで下山することになっていたが、山頂から松手山ルートへのトレースが全くなく吹雪く稜線で危険でヤカイ沢は私たち以外もということで齊藤の指示でヤカイ沢ルートピストンとなった。

今回のヤカイ沢の急登を下ることは大変神経を使った。途中でヤカイ沢から登ってくる登山者が何人かいたのだが、海崎がその人たちを見て「なんで山なんて登ってんだろ。あの人たちバカみたい笑」と言い出し、私は「こいつは何を言ってるんだ」とおかしくて笑ってしまった。そんなこんなで無事に13時に下山。荷物をまとめ、近くの街道の湯で疲れを癒した。その後、全員で道の駅で食事をして、過去の山行や思い出話に花を咲かせた。齊藤はいつも通り山菜そば的なやつを食べていた。この人も変わらないなあ…笑。ここで私は新潟市に向けて出発、齊藤らは東京へ帰京した。

私にとっては今回の山行は1年ぶりの獲得標高が1000m超で本格的な雪山だったこともあり、大変心配していたが、終始バテることなく(いつもはバテてる)、登頂でき心からホッとしている。

また、久しぶりに大キレットメンバーである齊藤と海崎、米子沢メンバーの木村と登山が出来たことが心から嬉しかった。社会人になって登山できる機会は大きく減ったが、このように思い出深い旧友と共に同じ時間を過ごすことができることはとても幸いなことだと感じる。このような繋がりをいつになっても大切にしていきたいと感じる山行だった。

(3) 現役学生の山行 (2023/10～2024/3)

山 域) 三浦アルプス

日 程) 2023/11/12

メンバー) 井上陽太(3年) 谷口至良(3年)

李淵棋(修士1年)

行動記録) 紅葉の里山縦走

藤野駅～金剛山～峰山～鉢岡山～

日蓮山～日蓮登山口



山 域) 筑波山

日 程) 2023/11/25

メンバー) 飯田隼介(2年) 中山莞爾(2年)

行動記録) 紅葉登山

筑波山神社～女体山頂～御幸ヶ原～

男体山～筑波山神社



山 域) 日和田山

日 程) 2023/12/23

メンバー) 井上陽太(2年) 飯田隼介(2年)

谷口至良(2年) 小原栞穂(2年)

齋藤優佳(1年) 中山莞爾(1年)

行動記録) 冬の低山ハイク、曼殊沙華鑑賞

武蔵横手駅～御常の滝～物見山～高指山

～日和田山～巾着田



山 域) 高尾山

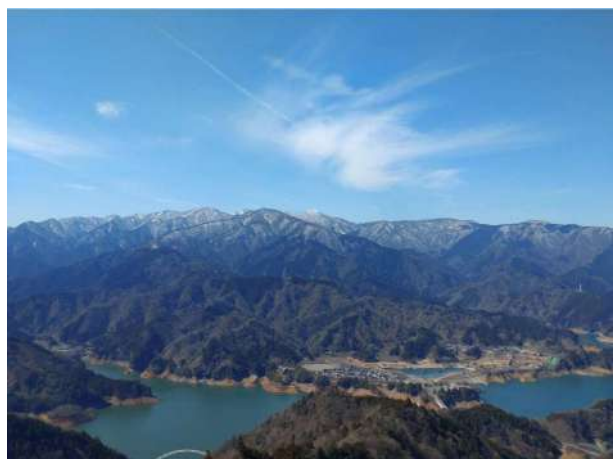
日 程) 2024/1/28

メンバー) 井上陽太(2年) 木村亮英(3年)

齋藤優佳(1年)

行動記録) 冬のハイキング

小仏バス停～景信山～高尾山～高尾山口



山 域) 兜山夕狩沢

日 程) 2024/03/31

メンバー) 木村亮英(3年)、谷口至良(2年)

行動記録) 春日居町駅(08:30)～林道分岐(09:15)～入渓点(09:30)～林道(12:50)～
兜山(13:40)～林道分岐(15:00)～岩下温泉旅館(15:20)

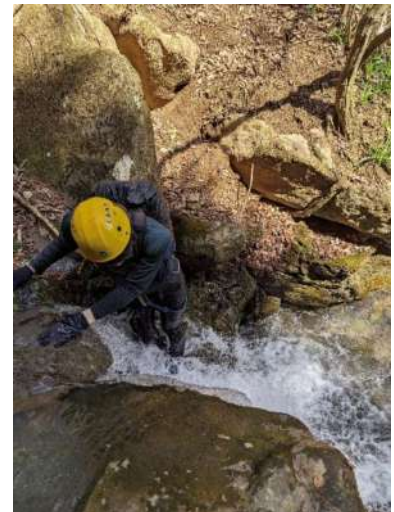
沢はじめとして『ウォーターウォーキング 1 改訂版』より夕狩沢を遡行した。クライミングで何度か 来ている身近な山の沢が遡行対象になっている。また、ネットに遡行記録がほとんど見当たらないことに興味を持った。

フルーツラインから林道に入る。進行方向に兜山。後ろには甲府盆地と富士山。3m滝は思ったよりも水量が豊富でシャワークライミングとなった。中盤から沢は平凡になり隣の登山道に上がることが推奨されている。倒木やゴロが多くあまり楽しくはないが、せつかく水量があるので林道までなるべく沢を歩いた。下山後は温泉(岩下温泉旅館旧館)に入った。歴史のある温泉のようだ。シャワーがないのは少し不便であるが新鮮だった。滑川温泉の福島屋もそんな感じだった。新入生も気軽に参加できるウォーターウォーキング企画はいいかもしれない。

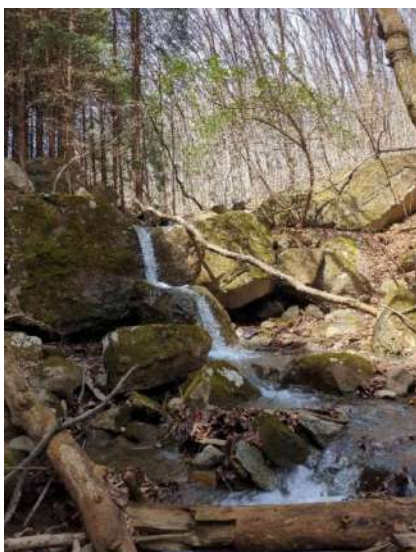
(木村亮英記)



3メートル滝



小滝を登る谷口



倒木が目立つ



山頂から甲府盆地や御坂山地、富士山

【COLUMN】

日本岳人列伝その9：大島亮吉

金子治雄（S41 年卒）

主な著作、「山 紀行と随想」

明治以来、我が国山岳史に残る様々な岳人が登場してきましたが、松濤明と共に最も青春の匂いを漂わすアルピニストは大島亮吉であることに異論はないでしょう。

2018年8月に明神岳S字状ルンゼで行方不明になった高野OB（S51年卒）のご遺族同行の第2次捜索支援で、倉川OBと日本山岳会の上高地山岳研究所に滞在した際、2度目の滞在でもあって、高野OBと最後に交信した管理人の元川さんから、彼がロビーの書架の前でいつも一人で本を読んでいた事、宿に残した荷の中に丁寧にビニールに包まれた大島亮吉の文庫本を見つけたこととお聴きました。元川さんはそれを見た時、それまで何度か山研を訪れていて顔見知りでも良く知らなかった彼が、改めて真摯な岳人であることを知ったとお話されました。その後元川さんは、山研を度々訪れている友人の前代表の行方OBが、高野OBのザイルパートナーであることを知り、改めて高野OBの山歴や思想を行方OBから伝えられました。そして日本山岳会の会報に高野OBの遭難事件についてエッセイの形で寄稿しました。その中で宿に残した荷の中に丁寧にビニールに包まれた大島亮吉の文庫本を発見したことに触れ、高野OBの遭難が安易な単独登山者の遭難と片付けてならず、彼の死が誤った判断や安易な行動で引き起こされた結果でなく、別なところに見落としはならない本質があるのではないかと述べていました。文中元川さんはまた、「愛すべき壁たちの誇りを取り戻す」ため奥又4峰新村・北条ルート初登攀のフリークライム伝説の実証を行った若き日の高野OBの思想と行動に触れて「日本山岳会は隠れた宝をひとり失ったのかも知れない」と記していました。



私の人生の終盤において、本棚の片隅にいつもひっそりとたたずんでいた大島亮吉の名が肉声で呼ばれ、これほど重く鮮やかに登場したことは驚きでした。大人の付き合いの山の会では個人の心を覗くような愛読書を話題にすることは皆無で、今まで仲間内でも大島亮吉を話題にすることは極めて稀なことでした。そんな経験から上高地の山研で元川さんから大島亮吉の名をお聴きするのは学生時代以来でした。

山の会の山行でたった1回だけ、大島亮吉について語り合った事がありました。それは4年の秋の最後の気象部の部山行での涸沢の晩の出来事でした。この時の10月下旬の新雪が根雪に変わる狭間の季節、岩と雪がシャープにミックスした穂高の神々しい美しさは、今でも眼前に焼き付いています。数日を残して小屋じまいする涸沢の広いカールに存在するのは我々の冬天1張だけで、6日間の間、北穂から前穂まで一人も登山者は見かけず、広大な穂高は我々の独り占めでした。部山行のメンバーは浜田（4年）高岡、栢沢（3年）奥野、芳賀（1年）OBと私の6人で、幸い天候に恵まれ、それぞれパーティを分けて連日滝谷C沢や2尾根、ジャンダルム飛騨尾根、北尾根、東稜など、美しい穂高の岩稜を楽しみました。当時山の会も多少場数を踏んで来たので、1年生2人が全てのルートでトップを務め、岩と根雪がミックスした穂高の急峻な沢や岩稜を縦横に駆け巡ることができました。

浜田、高岡OBが所用で下山した翌日の最終日、栢沢、奥野、芳賀、私4人が2パーティで天候悪化が予想された滝谷2尾根に行き、登攀終了まで持つと予想した天候が、笠ヶ岳に雲がかかった

と思ったら、たった 30 分後に滝谷は風雪に襲われました。凍り付いた水野クラックを手袋を脱いで素手で登ろうか迷っていたら、40m 伸ばしたザイルの先で奥野 O B が「寒いので早く登って来てください！」と叫んでいる声が今でも覚えています。その若さの塊であった奥野 O B も先日病気で逝ってしまいました。

誰もが登山を志すきっかけは幾つかあったと思いますが、実は新雪の穂高や滝谷には、私にとって山を志すきっかけとなった特別な想いがありました。それは高校 1 年の 10 月下旬の出来事でした。当時新雪の穂高で東大山岳部の滝谷の大量遭難事件があり、連日新聞の一面で詳細が報じられました。当時は谷川岳の大量遭難が社会問題化しており、岩波映画「遭難」が全国持ち回りで上映されており、社会全体が山の遭難に対する関心が高まっていた、私も家にあったベストセラーの井上靖の氷壁も読んでいました。

この東大の滝谷遭難事件の最中に、埼玉会館で以前から予定されていた埼大山岳部主催の岩波映画「遭難」の映画会があり 1 人で見に行きました。映画会での上映の幕間に突然山岳部の主将が演壇に登場し東大山岳部の応援要請を受けて今穂高から帰って来たばかりだと気負って挨拶をしていました。その時の会場は、言葉に表せない独特の雰囲気包まれていました。その時私の頭には、「氷壁」で読んだまだ見ぬ新雪の穂高や滝谷の姿が朧気ながら浮かんできました。高校に入学してから弓道部、ボート部と入部しましたが、いずれも自分に合わず 10 月になって暇になり次の活動を模索している中、自分の知らない登山という危険を伴った美しい世界と、それに集団で関わる大学山岳部という存在を知りました。

映画会の翌月、級友を誘い、軽登山靴のみを購入し泊りがけで晩秋の雲取に出かけ、山頂でご来光に輝く美しい霧氷に出会った瞬間、自分が今まで求めていたものがはっきり分ったのです。帰宅後山岳部入部を打診しましたが、途中入部を断られてしまったため、1 年生の終わりに友人と学校当局と紆余曲折の結果、当時高校では希少なワングルを創部し仲間を集めました。幸い下級生も含めアルピニズム志向と逍遥志向の多くの仲間が集まり、通常のワングル活動を行いながら、日和田山や武甲山の岩場に通ったり、北～南八ヶ岳の雪山縦走など本格的な登山を行いました。ワングル時代あらゆる山岳書、技術書、遭難記を回し読みしたのは上級生がいないため、皆で早く山の概念を知るためでした。当時仲間と乱読した著作の中で大島亮吉、田部重治、芳野満彦と出会い、それらを読むように読みました。前事務局の名達 O B も 10 代後の仲間でした。

下山を翌日に控え涸沢での最後の晩、涸沢ヒュッテから酒を仕入れて来て、食当の奥野 O B が用意した紀文のおでんをつまみながら、誰ともなく大島亮吉の「涸沢の岩小屋のある夜のこと」が話題になりました。大島亮吉は 3 月の北尾根の 4 峰で涸沢に転落し 28 歳の生涯をこの地で終えました。この時大島亮吉の名を口にしたのは高校時代以来でした。皆、大島亮吉は熟読しており、特に「涸沢の岩小屋のある夜のこと」は繰り返し読んでいて、奥野、芳賀 O B たちは文中のマンメリーの英語の構文も言い合っていました。栂沢 O B も「コッファーパレードで熱き茶を沸かし」など大島亮吉特有の独語や英語交じりの表現を披露していました。大島亮吉をこれだけ深く読み込んでいる岳友たちに出会ったのは、私にとって初めての経験でした。「涸沢の岩小屋のある夜のこと」は大島亮吉自身が述べているように、涸沢のある夜の事実を描写したものでなく、板倉勝宣の立山松尾峠の死から、山の遭難について慶応山岳部の仲間内で論じたことを一文にしたためたものです。おおよその文章の中に私たちが想う山での遭難に関する考え方が全て込められているような気がしていました。

この山行が終わると、私の学生時代の山行は翌月の富士の雪上訓練合宿と 12 月の横尾尾根から槍ヶ岳の冬山の 2 回を残すだけになりました。仲間と大島亮吉について愉快地語り合いながら、私

の心の中で山の会での4年間の山が過って来たのです。その夏、高校の岳友たちと北岳バットレスの中央稜と1、3、4尾根をトレースしたものの、大学を終えようとする今、自分が高校時代にこうありたいと思い浮かべていたアルピニスト像と大きくかけ離れてしまった寂しさも過って来ました。天幕を打つ静かな雪の音を聞きながら乗鞍雪上訓練合宿で命を落とした中村先輩も4年の終盤の時だと思い出しました。中村先輩とは乗鞍の2週前、新人だった私と2人で気象部の春山部山行の爺岳東尾根から鹿島槍の偵察に行きました。乗鞍後身近に感じた人の死によって張りつめていた糸がズタズタになり、遭難後の正月に高校の岳友2人で雪洞利用で目指した上州武尊は、ファイトが湧かず手小屋沢のコルであっさり撤退したこと、それから2月の八ヶ岳や5月の奥秩父の谷に行っただけで、新人合宿にも参加せず、本格的に復帰したのは夏合宿だったことなど思い出していました。翌朝は晴れて、樺沢OBは春山の偵察のため、キレットを越え、槍から燕を目指し、昨日新たに積もった新雪を踏んで南稜を1人で登って行きました。

大島亮吉は12歳で慶応商工部（中等部）に入学し、16歳の時、商工部の仲間たちと慶応義塾山岳会に入会してから28歳で亡くなるまでの12年間、彼にとって山が人生の全てでした。彼は大学卒業後に1年志願の幹部候補で麻布3連隊に入営しましたが、除隊後就職せず、外国語学校の夜学で独語を、アテネフランスで仏語を習い、欧州の岳人たちの著作を翻訳しながら学び始めました。彼の欧州岳人たちの山岳思想の研究は陸軍の麻布3連隊での見習士官室で本格的に始まったと言われています。勉学を好む彼は実業界に進まず慶應義塾高等部で教鞭をとることが決まっていた。

彼の慶応山岳部時代は、榎有恒がアイガー東山稜初登攀して帰朝後、それまでの開拓期の登山が一変し学生登山界に近代スポーツアルピニズムが勃興し、慶応義塾山岳部がその旗手となりました。

彼の大学時代の山行は積雪期北アのスキー登山を目指し、大正11年3月、槍ヶ岳スキー登山、5月下旬、立山、劔スキー登山、大正12年1月白馬岳スキー登山、4月槍平より槍ヶ岳スキー登山、大正13年3月下旬奥穂、北穂の穂高岳スキー登山を実施しました。慶応大学のカナダのアルバータ遠征は入隊時のため不参加となりましたが、除隊後は友人たちとの個人山行が主になり、田部重治や木暮理太郎、武田久吉に強い感化を受けて、上信越国境の僻地の山城や秩父そして北海道や東北の山々を歩き、更にパイオニアワークを求めて未知の谷川岳東面の岩場に関心を示しました。

しかしこの間、慶応山岳部が冬の北尾根を完登したことから、彼の脳裏に再びアルピニズムの炎が燃え、横尾岩小屋付近をベースに北尾根から前穂、奥穂、北穂、槍とスキーでの放射状登山を目指し昭和3年（1928）3月、最初に横尾本谷から南岳を登頂しましたが、翌日涸沢から北尾根を登攀中4峰で墜死しました。この当時は積雪期の稜線での高所露営は開発されておらず根拠地の露营地から深夜出発しスキーをデポしてアイゼンで登頂するピストン形式でした。

大島亮吉の現役時代やその後の著作は、ほとんど全てが慶應義塾山岳部の会報「登高行」に掲載されたものです。彼の没後山仲間たちによって「山回想と随想」（1930年）、「先蹤者アルプス登山者小伝」（1935年）が編まれ、今日私たちが彼の登攀記や紀行そして思想に触れられるのは、これらの書のお陰です。





大島亮吉と同時代に生きたジャン・コストというフランスの若きアルピニストがいました。彼は1920年16歳で登山を始め1926年、アルプスのラ・メイジュで遭難死しましたが、彼の遺稿「アルピニストの心」は、アルピニストを志す青春の書として多くの人に読まれてきました。大島亮吉は1916年に16歳で登山を始め1928年28歳で亡くなりましたが、高校時代初めて読んだジャン・コストの瑞々しい心情と、同時代に生きた大島亮吉の「山 回想と随想」の小屋・焚火・夢などの断章の心情はとても身近に感じられ大島亮吉の著作は私にとっては、老成化した文体の岳人たちの著作とは一線を画していました。

たとえばジャン・コストの「アルピニストの心」では
 「冬山のパノラマこそは格別なものであり、筆舌には言い尽くされないほど美しいものだ。山よ、お前はなぜそんなにまで美しいのか！」
 「人がひとりの女性を愛するように、ぼくは山を愛する。だからこそ、休暇を待ち焦がれるのだ。僕は今の生活が本当の生活でないように、現在は待機にすぎず、あたかも聖人が天国に入る日を待ちながら生活しているような気持ちで暮らしているのだ。」
 「気高い魂は、偉大であり、困難で、神聖なもの、つまり山岳へ本能的に向かわせる天性の感情を有しているものだ。」
 大島亮吉の断章の1部では。
 「君の山登りについて、心情を吐露する言葉を聞きたいと問われたら、ああ僕はなんと答えよう。」
 「アルピニストはみな山の中におおののハイマートを持っている」
 「山ほどその肌色をよく複雑多様に変えるものはない。たった光と影と風と空気の4つの染色素しかもっていないくせに」
 「インデアン・サンマアというような11月のある日を、僕は落葉松の林のなかの枯草の上に寝転んで、遠くの雪で光る山頂を眺めて空想したい」
 大島亮吉は若くしてアルプスに逝いたエミール・ツグモンディの「登山家の神は2つの容貌を持つ」という心を、そうありたいと実践した生涯でした。一つの容貌の目標は闘将マンメリーであり、もう一つの容貌はアルプスの典雅な詩人エミール・ジャベルを夢想していました。彼にとって山は単なるスポーツでなく文学であり美術であり哲学でもありました。
 彼の雪山登攀記も味わい深いですが、逍遙紀行に彼の真価を感じます。「石狩岳より石狩川に沿うて」「峠の十文字峠の項」「荒船と神津牧場付近」、そして断章の「小屋・焚火・夢・頂・谷・書斎」等です。

人は年齢が増すことによって成熟して行きますが、それに従い確実に喪失して行くものがあります。それは青春と言われる瑞々しい心です。尾根を吹き抜ける風や、峠路に湧き上がる雲などは、何十年経ても歳を取らず若い時と同じなのに、それらを感じる瑞々しい心は知らず知らず喪失して行きます。大島亮吉の著作は、彼が感じた山の風や雲や霧や小鳥のさえずりなどによって、私たちに瑞々しい心を喪失しないように繋ぎとめる役割を果たしてくれます。それが彼の著作を青春の書とする所以と想います。

岳人列伝の中で一番書きたかった大島亮吉のため、今回だけ特別にページを増やして頂きました。次回は岳人列伝の最終回、松濤明、そして山岳部以外の主な早稲田岳人たちを紹介します。

【お知らせ】

2024 年 O B 合同合宿の開催について

稲門山の会の O B 合同合宿については次のとおり開催いたします。

- ① 日 時：2024 年 10 月 3 日(土)～
 - ② 会 場：信州の隠れ宿 まほろば
 - ③ 住 所：長野県長野市塩生乙 1 8 7 6 ☎ (026) 229-3740
- 宿泊費：17,000 円 夕食、朝食、岩魚の骨酒付き、酒はなんと
「佐久の花」です。 連絡先：yukuemnamakata@gmail.com



【編集後記】

2024 年から稲門山の会も新しい村田体制になりました。新執行部の皆さんは、過去は振り返らないで、現在を基準に学生のサークル活動の指導だけでなく、晩年の山を生きがいとしている O B への応援もよろしくお願いします。

さて、自分事ですが歳月の流れは着実に我々を終末に向かって押し流していきます。そんな時期に、6 年前のクライミングウオール墜落事故と二つの遭難を契機に、早大山の会と稲門山の会に深く係ることになりました。この歳月の流れの中で、山や仕事や家庭を振り返ってみて、自分が生き残ってきた証をどのように総括しようか、などと考えている今日この頃です。

先鋭的な登山後 20 年間も北極圏を単独で走破してきた冒険家 T K 氏は、「なぜそんなに危険な冒険を続けているんですか？」という問いに「危険じゃないよ、俺ズルして生きているから、本当にまじめな奴はもう山で死んじゃっているから」

さて、稲山会通信第 49 号の巻頭言は、新代表の村田宣男 O B (S52 年卒) です。今後どのように稲門山の会を引っ張っていくのか楽しみです。

特集Ⅰは、「2024 年総会・新年会」です。久しぶりに懐かしい顔ぶれが大隈会館に一堂に会し、涙いたしました。やはり母校早稲田で新年会をやるのは良いですね。その他、新役員の本田伸樹 O B (S56 年卒)「入会の頃」、西山透 O B (S57 年卒)「私の失敗事件簿～楽しい山登りは安全と安心から」も投稿をいただきました。

また二人の O B から「「低山」歩きもまた楽し！」深澤徹 O B (S51 年卒)、「北アルプス今昔物語」宮野準治 O B (S35 年卒)からも特別寄稿をいただきました。読みごたえがありますね。

特集Ⅱは、「2023 年度の記録」です。O B の中で最も精力的に山に挑んでいる笠原豊 O B (S40 年卒)の北アルプス白馬岳～不帰キレット～唐松岳の縦走。小田直輝 O B (R5 年卒)の厳冬の平標山の記録、現役学生の昨春秋以降の山行報告です。

金子治雄 O B (S41 年卒)の連載「岳人列伝⑨」は若くして日本の登山思想に大きな足跡を残した大島亮吉の出色の評伝です。残念ながら戦後、思想家とアースリートの分化が進み、このような思索に富んだ、若い登山家いなくなりました。

「2024 年の返信はがき」を読むと、いまだ山行を続けている O B も多くみられます。是非とも皆さんの投稿お待ちしております。次回の特集は「山の備忘録」。自分の生涯で最高の山、「あぁ～生きていてよかった」という岩や雪の思い出などどしどしとお寄せください。登山以外の会員の活躍も紹介しておりますので、自薦他薦の投稿お待ちしております。 行方正幸記